

## 「昭和 23 年の学制改革に遭遇した世代の『思い出の記』(その 3)」

## 《 相馬中学校に入学し相馬高校卒業となる等 》

朴 下 駄 の 頃 <sup>(※1)</sup>高普 3 回卒 松本 誠 <sup>(※2)</sup>

私が相馬中学に入学したのは昭和 20 年の春である。太平洋戦争の最末期、米軍の相次ぐ爆撃で我が国の主要都市は焦土と化し、生活物資、特に食料は底を尽いて飢餓線上にあった。このような状況下でありながら、国民の大部分は国に対する忠誠心と順応精神を保ち続け、本土決戦に備えて遮二無二頑張っていた時期である。

入学時の服装は、国防色(カーキ色)の麻様学生服(実は桑の繊維製)に戦闘帽、中古ながらも茶色の牛革製の背囊(カバン)、巻脚絆(ゲートル)にブック靴。教科書は地元在住の上級生から譲ってもらった。

近所の相中卒業生から生徒心得などをしっかりと叩き込まれ、学校から配られた焼印入りの木札を軒先に掲げて、緊張と希望を抱いて原町からの汽車通生活が始まった。

入学式は講堂で行われたかどうか定かな記憶がない。それよりも、毎朝の朝礼で先生から厳しい訓示を受けたり、ズボンのポケットの縫い合わせを命じられ、服装検査で身を縮ませた生徒控室での印象の方が強い。ただ校内は 3、4 年生の大部分が勤労働員で学校を離れていたため閑散としており、覚悟していたほどの緊張感もなく、のんびりと構えていたような気がする。

その代わりに、勤労働員が待ち構えていた。最初にさせられたのは川原町にある野球場の開墾作業だった。この結果、運動場は北庭のみとなり、この北庭もしばらくして掘り起こされて、学校から運動場が消えてしまった。駒ヶ嶺のグライダー練習場の整地作業に駆り出された。この作業で受けた傷痕が今でもわたしの人差し指に残っている。

続いて原町の飛行場作業が待っていた。ここは陸軍の飛行場で、連日特攻志願の若い飛行兵達が猛訓練をしていた。我々の役目は飛行機を掩蔽するための掩体壕を作る作業だった。水泳プールが五つも六つも入るような広さの土地を 2メートルほども掘り下げ、掘った土を穴の回りに盛り上げる作業だが、なにせ道具がシャベル、万能、モッコだけという手作業だから並大抵のことではなかった。この作業のために初めは家から通っていたが、6月に入ると地元の小学校に泊まり込みでの作業となった。毎朝校庭に整列し、シャベルを肩に飛行場の南縁にある通称「ぶんぶぎ山」の作業現場まで 2km ほどの道を、途中軍歌を歌いながら行進させられた。泊まり込みは 2 週間位続いたが、大豆入りの御飯を食べながら徴用で動員された大人に負けじと頑張った。そのあと、草刈作業や塩田作業などに駆り出されているうちに、8月に入って学校は休みとなってしまった。

結局、一学期の授業は受けず仕舞いだった。休み期間中に、広島・長崎に原子爆弾が投下され、原町も敵艦載機の爆撃や機銃掃射を受けて人が死んだり、駅、学校、工場などの主要建物が大きな被害を被った。そして無条件降伏・終戦。玉音放送は疎開先の上真野で聞いた。

9月に入って 2 学期が始まった。学校の様子が一変し、閑散としていた教室は 3 年生や 4 年生で埋った。さらに、1、2ヶ月の間に予科練帰りなどの上級生たちが学校に戻って来た。これらの上級生達が、中には軍服や飛行服姿で、半長靴などを板張りの中央廊下に響かせて闊歩する姿に、我々 1 年生は圧倒されてしまった。その結果、今まで自由に往来していた廊下なども、上級生の目を避けて体を強ばらせて歩くようになったし、便所なども上級生の行くところには近づかないようになってしまった。

この時期、「一億総懺悔」とか「四等国」、「戦争責任」といった言葉が重々しくのしかかり、一方、「ハハハハ」、「ギブミーチョコレート」、「洋モク」などというカタカナ語が流行して、社会の混乱ぶりを象徴しているかのようだった。しかしながら、殆どの国民は食糧不足や衣料不足などの生活苦に追われ、生きるのに精一杯の時期でもあった。

学校では、教科書の墨塗りが行われ、授業内容が突然変わるなどして戸惑ったり、上級生のストライキで長友公園に集められたりさまざまな錯誤や混乱があったが、教師も生徒も新しい秩序を求めて模索していたに違いない。社会科の時間では、出されたばかりの「プレスコード」を教材にして、対話方式の授業を行って好評を得た先生もいた。

このようにして、平常授業の毎日を迎えることになったが、我々汽車通組にとって厄介なことには、列車の運行事情が最悪になっていたことだ。

石炭不足と車両不足で列車の運行本数が激減したうえに、間引き運転や遅延が日常茶飯事だったのである。さらに、ようやく到着した列車は引揚者や買出し部隊などの遠距離乗客で占められ、通路に大きな荷物を抱え、折り重なるようにして寝込んだり座り込んだりしているので、押しても引いても詰まらない。このような状態だったから乗れないことが再三だった。ただ、好意的な駅員がいて、乗り遅れた生徒を普段は乗れない郵便車両に乗せてくれたり、時には貨物列車に乗せてくれることもあった。貨物列車では、有蓋車は扉の開閉が出来ないので無蓋車に乗ることになる。駅員から「体を伏せて外から見られないようにしろ」とか言われるが、このような注意を守れるような生徒はいない。開放的な車両の中で大声で唄を歌ったり、わけの分からぬ奇声を発したりして解放感を満喫した。トンネルに入って、運悪く機関車から吐き出される炭かす混じりの煤煙と蒸気で真っ黒になっても平気だった。

一方、帰りも一苦労だった。遅れたとなると、待合室は混んでいるし、学校に戻っても仕方がないから、生徒達の溜り場となっていた日通の荷物置場でごろごろしながら待つことになる。出回り始めた赤本にお目にかかったのもこの頃だった。土曜日で列車が遅れたときなどは、日立木駅まで歩いたこともあった。もっとも、その理由は列車の都合だけでなく、金もなくクラブ活動もない時期だったから、このようなことをして暇を潰す外なかったのである。下駄履きで国道を百尺観音まで歩き、観音さまの上から松川浦を眺めたり、観音さまの後頭部に入ったりして時間を潰す。それから日立木駅まで歩くのである。時には線路伝いに鹿島まで足を延ばし、興に乗れば原町まで歩いてしまう。

その後、朝5時頃の前原始発の列車が運行され、これを利用するようになった。ところが、学校に着いても始業時まで1時間以上もあるから、ここでも暇を持って余してしまう。そこで草野球や卓球をやるようになった。草野球のボールは芋柄やビー玉を芯にして毛糸やたこ糸で巻き、表皮は木綿の布を硬式野球の表皮のように瓢箪形に切ってかぶせて縫い合わせて作った。ただ、このボールは皮がすぐ切れてしまうので修理が大変だった。汽車の中で明日の分を作ったり、時間中に仕上げ供給してくれる有難い名人もいた。バットは、窓枠の下の木が最高だった。卓球は、工作室のテーブルを使い、ラケットは腰板を剥がして使った。

このような事ばかりしていたので、学校には大分迷惑を掛けてしまったが、クラブ活動が再開されるようになってから、草野球や腰板卓球の常連の中から野球部や卓球部に入って活躍した者も数多くいるし、歩くことの好きだった我々は郷土部に入って遺跡調査や古墳の発掘作業に精を出すようになった。

その後、学制改革などのため、途中学窓を去った友人、新しく迎えた友人と苦楽をともにした6年間だったが、現在でも母校の生垣に因んだ「からたち会」の名でしっかりと結び合っている。

(※1) 相中相高百年史より。

(※2) 昭和26(1951)年卒。原町出身。